

2024 年度 山梨学院高等学校 学校評価

I. 分掌・学年の振り返りと自己評価

評価・振り返り項目

- 項目1：生徒一人ひとりの夢を応援する（生徒の進路実現）
- 項目2：教育力の山梨学院（私学としての競争力を高める）
- 項目3：重点目標（進学実績の向上、ハイスchoolスポーツ、文化活動の振興、国際化の推進）
- 項目4：分掌・委員会・教科会の活動の推進（組織力の向上）
- 項目5：教職員の基本的な職務の改善

分掌・学年主任による自己評価を元に、学校長が最終評価を行った。総合評価である。

A：十分に達成 B：おおむね達成 C：やや達成 D：未達成

●分掌名（ 教 務 ） 評価：A

項目	成 果 や 課 題
1	・選択科目の検討と早期決定ができた。 ・長期休業中の課題の検討と生徒への提示が早期にできた。
2	・生徒の進路希望に沿ったきめ細やかな教育課程を提供することができた。 ・全てのコース・系列で生徒を主体とした学校説明会、オープンキャンパスが開催できた。 ・本校入試の実施にあたり、入試事務局と連携して取り組んだ。また、Web 出願の適切な処理および管理ができた。 ・生徒（留学生を含む）の満足度をより一層高める工夫が求められている。 ・学校説明会やオープンキャンパスが生徒募集につながる重要な行事であることを教員一人ひとりがより意識した取り組みにする必要がある。
3	・留学生の選択科目を工夫する余地がある。 ・留学生が活躍できる場を創出したい。
4	・「観点別学習状況」について、各教科が取り組めるよう支援出来た。 ・「総合的な探究の時間」や「特別活動」への取り組みが充実してきた一方で、クラス間の差異がある。 ・「観点別学習状況」の開示の仕方について、検討の余地がある。
5	・行事ごとに振り返りを実施し、職員会議で共有することができた。 ・行事の要項を早期に作成し、時間や係分担等を職員会議で共有することができた。 ・校務システムの改善を図ることができた。 ・留学生事務局との連携および支援のあり方に改善の余地がある。

●分掌名（ 生徒指導部 ） 評価：B

項目	成 果 や 課 題
1	・生活指導を通じ、将来の目標に向かって努力し、目的を持ちながら日常生活を送ることができた生徒が大半であった。 ・携帯端末や身嗜みなどの規定を生徒が自主的に守る姿勢を涵養する必要がある。教員の統一した理解と指導が欠かせない。
2	・生徒一人ひとりが夢を持ち、夢に向かって真摯に努力する生活態度を育むことに努めた。 ・日常生活の中でいかに遵法精神やマナーを育む指導を行うか検討・実践を絶えず行う必要がある。 ・通学時の自転車乗車マナーに課題が残る。
3	・国際化の推進に伴って生じた校内の諸問題に対応した。 ・留学生事務局や国際交流係と担任、学年、生徒指導部とが一層の連携を図っていく必要がある。
4	・分掌内で種々の問題の共有と打ち合わせを行い、課題を明確にして対処することができた。 ・生徒指導にあたる教員間の目線合わせと非常勤講師の先生方との情報共有が課題である。
5	・全教員参加のもとでの登校指導を通じて生徒指導および登下校時の生徒の安全に対する意識を高

	め合うことが出来た。 生徒に関する個人情報の管理を引き続き厳重に行う必要がある。
--	---

●分掌名（ 進路指導部 ） 評価：B

項目	成果や課題
1	- 個々の特性に応じた進路実現に向け、支援や取り組みができた。 - 進学講演会を通じて最新の入試情報を共有するとともに、進路実現に向けた具体的なイメージを生徒に持たせることができた。 - 特進コースでは、大学入試を突破したOB・OGの取り組みを聞かせることで向学心を高めることができた。 - 生徒の進路希望を優先するあまり、指導が有効に働かないケースもあった。 - タブレットを活用した効果的な指導法の確立が急がれる。
2	- コースに応じた適切な進路行事の企画、運営、実践ができた。 - 系列大学・短期大学との連携を活かした指導ができた。一方で、高大連携の意義を十分に理解できていない生徒も見られる。事前指導のあり方を検討する必要がある。 - 大学・短期大学の出願方法をよく理解させる指導に努めたい。
3	- 強化部から有名国公立大学へのスポーツ推薦合格者を輩出することができた。 - 高大連携事業を通じて生徒に自己の適性を考えさせ、進路選択をさせることができた。 - 特進コースの最終的な入試結果は待たれるところだが、難関大合格の報に連日触れるなど健闘ぶりが光る。 - 留学生に対して丁寧な説明ができた。一方で、留学生の進路指導には改善するべき点がある。
4	- 高大連携委員会では、高等学校の意見がより反映されるプログラムになった。 - 会議では、その都度課題を解決し、PDCA サイクルが構築できた。 - 主にメール会議を通じて担任や他部署とも率直な意見交換ができた。また、課題を共有し、解決に向けて理解を深めることができた。
5	時間のやりくりが厳しい中でも担任の先生方は生徒との対話を疎かにすることなく向き合っていた。

●分掌名（ 研究・研修部 ） 評価：B

項目	成果や課題
1	- 教職員の指導力向上が生徒の進路実現に直結すると考える。そのための研修が実施できた。 「初任者研修」は計画通り実施できた。 「夏季研修」「研究授業」等を開催し、教職員の資質向上の機会にすることができた。 「初任者研修」と「中堅教員研修」は計画通り実施できた。他にも多くの研修会が行われているので、より積極的な参加を期待したい。
2	- 教科および探究、特別活動での観点別評価の実施が進んだ。 - 推薦入試の書類に観点別評価の記載が求められる時代になった。いかに観点別評価を実施し、表現できるかが求められ、その指導力が問われている。
3	「探究」「特別活動」の年間計画を作成し、各コース・系列の3年間の見通しが立てられた。 - 進学コースでは、「探究」の時間に Classi キャリアナビを活用した実践が行われた。 「探究」「特別活動」の実践は教員の指導力が問われる。進学実績に影響を与えるものでもあることを教員自身が認識しなければならない。
4	- 教科研究を目的とした「教科主任会議」を実施し、研修担当の連携を密に行った。 - 研修担当者は非常に協力的であり、教科主任のリーダーシップの下、研究が推進された。 - 時間調整が困難な時はメールで意見交換したが、対面での開催が望ましい。開催時期を検討するなど工夫をしたい。
5	- ペーパーレス化を推進した。会議資料は事前に送信し、会議では集中的に意見交換するなど、会議の円滑化を図ることができた。 - 研究授業の指導案・資料等の提出はデータにすることでペーパーレスの研究会が実現できた。 - 事前に送信した資料に全員が目を通す仕組みを考えたい。

●分掌名（ ハイスクールスポーツセンター ） 評価：A

項目	成 果 や 課 題
1	- 年間目標と年間計画を策定し、月一回のハイスポ運営会議や競技力向上委員会を開催することができた。各部の進捗等を共有することで、支援および環境整備を図ることができた。 - 学年や担任と連携し、個別に進路支援を行うことができた。全般的に公式戦において好成績を残し、部活動の実績が進路実現につながった。 - 練習メニューの工夫を図るなど、所属している全ての生徒の満足度向上を目指したい。
2	- 野球、サッカー、駅伝、ラグビー、バスケットを中心にメディア報道で数多く取りあげられた。特に、県総体、関東大会、全国大会での活躍が目覚ましく、山梨学院の存在感を示すことができた。 - 少子化に伴い、選手の獲得は例年課題になっている。 - 募集状況や戦績等に伴う強化指定の見直しと専用研修ハウスの整備を急ぐ必要がある。
3	- ハイスポ運営の考え方を競技指導者や教職員と共有し、ハイスクールスポーツの振興に努めた。 - 公式戦での各部の目標設定と振り返りを共有することができた。 - 働き方改革に対応した勤怠管理が煩雑で改善を図る必要がある。
4	- ハイスポ内の分掌を決め、役割を分担した活動ができた。 - 定例の会議（ハイスポ運営会議・競技力向上委員会等）を予定通り実施できた。 - 寮運営は多岐にわたり困難な課題を抱えている。
5	- 各部とも計画的に活動することができた。また、月一回の定例会議やメールによる連絡、臨時小委員会等を通じて所属教職員の職責を意識化する運営ができた。 - 活動実施届、活動記録簿、寮・研修ハウス記録簿等を通じて状況把握および助言ができた。 - 公式戦をはじめとする各部の活動や寮の視察に大変多くの時間を割かなければならない。 - 指導者の雇用形態が多岐にわたるため、勤怠管理が複雑である。

●分掌名（ 特進コースP系列 ） 評価：A

項目	成 果 や 課 題
1	- コース会議（出願検討会）を通じて、個に応じた大学出願先を助言・指導することができた。 - 大学見学研修旅行や模試などの振り返りを通じ、生徒の進路の具体化を図ることができた。 - 入学直後の学習会を通じて生徒の学習意欲高揚を図ることができた。 - 生徒の進路について、担任を中心とする指導方針の共有ができた。 - 計画していた探究学習の一部が実施できていない。
2	- 土曜特別講座では、大学入試に向けた実戦的指導ができた。 - 系統的にコース行事を催行し、所期の目的を達成することができた。 - 生徒個人個人の学力やチームワークが発揮され、各種コンクールで顕著な成果があった。 - 学校説明会とオープンキャンパスでは、在校生および卒業生の協力を得てコーススタッフが協働し、中学生・保護者から高い評価をいただくことができた。
3	- 全国模試で上位層が厚くなってきている傾向が見られる。 - 難関大学を目指す生徒の育成に力を入れ、実際に受験する生徒を増やすことができた。 - 東京大学2名、慶應義塾大学医学部1名、国公立大学医学部6名など、最難関大学に多くの合格者を輩出することができた。 - コース価値および学習効果を高める取り組みが行われた。 - 学習や進路に対して受け身的な生徒に対し、継続的に指導を行っていく必要がある。
4	- コース内およびコースの学年間で協力的に分掌を担うことができている。 - 定期的に情報共有を行いながら、生徒の指導にあたることができた。 「生徒にとって有益であるかどうか」を意識した業務の効率化が大事である。
5	土曜特別講座、代ゼミ特別課外、進学講演会、模擬試験などの課外指導が教員一人ひとりの献身的な指導に支えられている。

●分掌名（ 特進コースA系列 ） 評価：B

項目	成 果 や 課 題
1	- 国公立大、難関私大への合格者を輩出することができた。 - 総合型選抜や学校推薦型選抜に対する効果的な指導体制および方法の充実を検討する必要がある。

	部活動で土曜日の模擬試験や長期休業中の集中講座に出られない生徒たちのフォローが課題である。
2	- 学習と部活動を両立させ、各種大会で結果を残すことができた（ラグビー、陸上、卓球など）。 - 探究活動の充実を図り、研究成果を SDGs 探究 AWARDS 2024（未来教育推進機構主催）に提出することができた。
3	- グローバルスタディーレクチャー、グローバルスタディーズキャンプ、カナダ語学研修旅行を通じて、世界の諸問題に対する生徒の関心を高めるとともに、キャリア形成に役立てることができた。 - 留学生事務局と連携して留学生への指導、支援ができた - 短期留学生の受け入れを通じ、生徒の異文化に対する開かれた心の育成につなげることができた。 - 海外提携校の拡充、英語教育プログラムの拡大を図りたい。
4	教員それぞれが職務に責任感を持って取り組むことができた。
5	Google 共有ドキュメントを活用し、朝の打ち合わせの省略、連絡事項の伝達の徹底と情報共有、フィードバックを確実にを行うことができた

●分掌名（ 学 年 ） 評価：A（3学年） B（1学年・2学年）

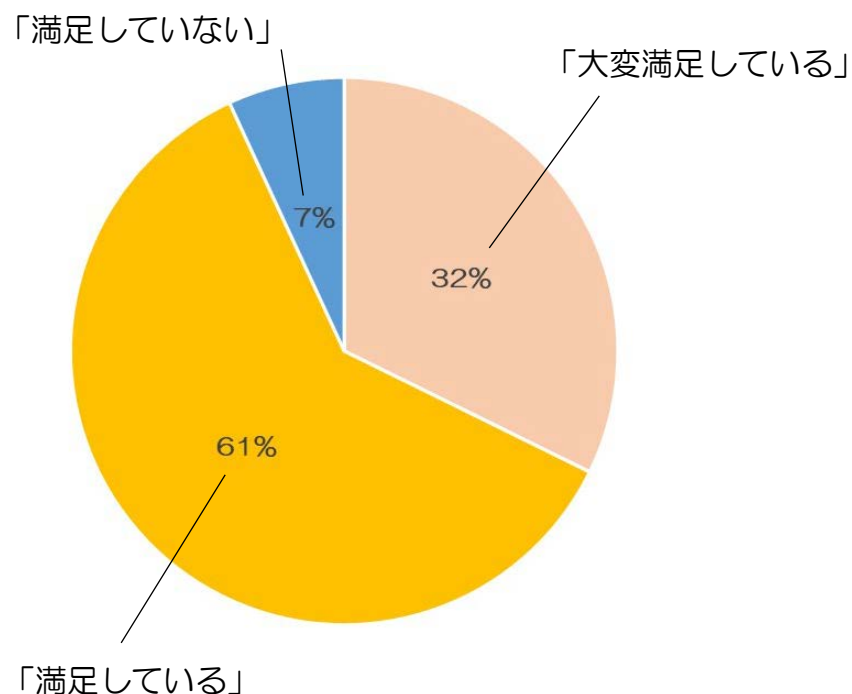
項目	成 果 や 課 題
1	- 大半の生徒が将来の目標に向かって努力し、目的意識を持ちながら日常生活を送ることができた。 - 個別面談がしやすい環境や雰囲気をつくることで、随時生徒の声を聴きながら指導を行うことができた。 - 二者面談をたびたび行い、日頃の悩みや進路について生徒とじっくりと話すことができた。 3年間の進路指導を見越した指導を行うことができた。 - 進路について悩んでいる生徒や保護者に寄り添いながら、指導することができた。 - 生徒の進路選択をサポートし、志望する大学・学部チャレンジさせることができた。 - 高大連携プログラムを通じて様々な分野の模擬授業を提供し、進路に対する意識を高めることができた（一方で、その意義を理解していない生徒も一部見られた）。 - 行事を通じて進路意識の醸成を図ることができた。 - 生徒個々の学習活動に対して円滑なサポートを行うことができた。 - 系列大学・短期大学を目指す生徒・保護者への分かりやすい進路情報の提供が必要である。 - 留学生一人ひとりに対する指導や助言がより円滑に行えるようにしたい。
2	- 個々が学習に励むだけでなく、コンクールなどの挑戦に積極的であるなど、集団として取り組む雰囲気があった。 - スポーツと文化の両面で顕著な大会実績があった。 - 強化部を中心に好成績を残し、クラス内の他の生徒も感化されて切磋琢磨する雰囲気ができていた。 - 部活動で頑張らせるだけでなく、日頃の私生活を正す重要性も指導していきたい。
3	- 中高一貫の成果を全面に出せた。一方で課題も感じた。 - 東京大学2名合格をはじめとする高い進路実績を残すことができた。 - 系列大学・短大について説明する機会を増やし、特徴や魅力を紹介することができた。 - 全日制と通信制が連動することでより多くの生徒の進路実現につながっている。 - 強化運動部が公式戦で目覚ましい成果をあげることができた。 - 留学生受け入れ事業が年々充実しつつある。留学生事務局と連携しながら、留学生への支援をさらに充実させていきたい。 - 留学生の日本語能力をさらに向上させる指導と取り組みが必要である。
4	- 各分掌、委員会とも計画的に実施され、また、振り返りがきちんと行われているので、確実に推進できている。 - 学年所属教員が連携して生徒対応、情報共有ができた。 - 研修旅行において、生活面の課題は見えたが、事前・事後の学習を含め、生徒にとって良い思い出となり、有意義な活動となった。 - 研修旅行は充実した旅になったが、「研修」の側面が十分ではなかった。事前学習により力を入れて取り組むことが必要である。 - 人手不足のなかで様々な課題に直面した一年だった。

	・業務の省略化や簡略化をすすめ、教員がより授業や生徒対応に力を発揮できるようにする必要がある。 ・各分掌の協力を得て留学生クラス一期目のカリキュラムができ上がり、無事運営を始めることができた。 ・教務、進路、研修など、多部署が協働して取り組む課題が増えている。 ・遵法精神を育む指導を各コース統一的に進める必要がある。 ・共有フォルダ内のデータ、記録等を整理して残す必要がある。
5	・率先して業務に取り組むことで助け合うことができた。 ・提出書類や各種申請等の電子化による利便性の向上と業務負担の軽減が実感できている。 ・生徒指導のあり方をより統一性をもって協力しながら取り組む必要がある。 ・日常の様々な場面での指導こそ重要であることを意識した学年・学級経営が行われることを望む。 ・さらなるDXの推進により、スムーズかつ効果的な指導が期待できると思われる。 ・勤務時間内に職務を全うすることが難しい。

Ⅱ. 生徒アンケート結果

2024年10月に全校生徒を対象にアンケートを実施し、1148件の回答があった。

アンケート：学校生活の満足度について



93%の生徒が、「大満足している」または「満足している」と回答

Ⅲ. 保護者アンケート結果

2025 年 2 月に全保護者を対象にアンケートを実施し、482 件の回答があった。

